

恐るべし火鍋の女王

舌が麻痺し、胃袋が焼け付くほど辛い火鍋。
この激辛料理を中国全土、果ては海外にまで広めた女がいた。
妖艶な踊り子が舞う店で女王の鍋にいざ挑戦…。



私は「火鍋」が苦手である。理由はとびつきり辛いからである。タイ料理やら韓国料理やらで、私の胃袋も長年、それなりの訓練を積んできたはずなのに、火鍋の完璧な辛さに比べたら、もう月とスッポンほどの違いがある。私の舌は痺れに痺れ、味覚を識別する機能を喪失してしまふ。料理といつにはあまりにむごい。

山盛りの唐辛子をぶち込み、赤く濁った、グツグツと煮えたぎる汁の中に、牛や豚の臓物、魚、野菜などを浸して食する。この際、食材の味はほとんど関係ない。素材の良さを生かす日本料理の対極にある料理と断言できる。

そんな激辛料理を全中国に普及させた女性がいた。「火鍋の女王」と呼ばれる



重慶上 長江 を行く



野中章弘

1953年 兵庫県生まれ。アジアをフィールドに活字、写真、ビデオによるレポートを続ける。著書に「沈黙と微笑」「粹と絆」など。早稲田大学、東京大学講師。アジアプレス代表。

何永香さん(51)だ。21年前、テーブルが三つしかない火鍋屋を開業。以来その類まれな商才を発揮して、とんとん拍子に事業を進展させてきた。いまや米国にも支店を開き、従業員6000名という企業グループの総帥である。

「ゼロから10万円(1元約13円)儲けるのに6年、10万円から100万円にするまでに1年、いったん100万円の儲けをあげれば、1000万円までは瞬く間だった」

「小夫(小々な白鳥)へ、何度も足を運んだ。広い店内はいつも予約で満席に近

貧しい家庭に生まれ、学歴もなかつたひとりの主婦は、成功への階段を駆け上り、改革・開放を象徴する立志伝中の人物となっていた。「1万円もあれば一生暮らしていける」と思った時代もあったのに……という何さんの資産は3.2億円。今はもう押しも押されぬ大実業家として名を馳せている。

人気の秘密は、食べ放題で100円ほどという安さと舞台で行なわれる官能的なショーである。見ようによっては安手のキャバレーみたいだが、中国ではまだまだこのようなショーは珍しい。

私は重慶滞在中、何さんの経営する「小夫(小々な白鳥)へ」何度も足を運んだ。広い店内はいつも予約で満席に近

いろいろ調べてみると、火鍋は重慶を発祥の地としている。それにはわけがある。この街は長江と嘉陵江という大河の合流点に発展し、港湾労働者が多かった。唐辛子のたぐり入った火鍋は、水に濡れた身体をカツと温めてくれるし、調理が簡単で安い。また港付近には家畜を食肉処理する場所もあり、そこで捨てられた臓物などを食材にすることもできた。火鍋第一号店は中華民国時代の1930年代初頭に営業を始めたといわれている。以来70年、火鍋は庶民にも愛され、屋台を含めると重慶だけでも火鍋店の数はなんと2000軒。やはり中国人は心臓も胃袋もタフなようである。



とても鍋料理のレストランと思えない妖艶な踊りが繰り広げられる